

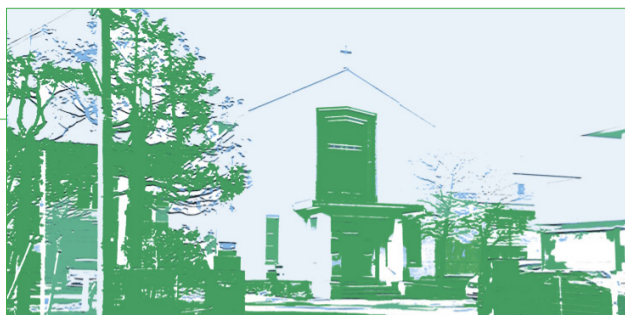


瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行/カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)
日曜日 7:00am、9:30am



苦しみ—世界病者の日にあたって—

主任司祭 小西 広志 神父

時折、病者の塗油の秘跡を執り行うことがあります。前は年に数回でしたが、年を追う毎に頻度が増えました。臨終を迎えた信徒の方ばかりではなく、何か大きな病気で苦しむ方、あるいは重大な手術を前にして、この癒やしの秘跡を願う方が多くなりました。病室で秘跡を授けることもあります。入院の前などに教会を訪れて聖堂で授けることもあります。また、この秘跡はゆるしの秘跡と聖体の秘跡と組み合わせられて授けられた場合、さらに豊かな恵みをもたらすものですが、かなり多くの人がご聖体拝領とゆるしの秘跡を同時に望まれます。かつての終油の秘跡というイメージと、それにまわりつくネガティブな受け止め方は、もはやこの秘跡を受ける方々にはないように見受けられます。こうして、時の流れと共に信仰の理解、秘跡についての理解は進んでいることを教えられます。

さて、病者の塗油を執り行っていて、その度にこころにしみ入ることばがあります。それは、塗油の後の祈願文です。

祈りましょう。

神の子イエズス・キリスト、

あなたは人間を救い、病人をいやすために

すすんで人となり、苦しみを

受けられました。

心とからだの健康を願うこの病人を顧みてください。

あなたの名において聖なる塗油を受けた者が支えと慰めを得て、

力をふるい悪を退け(あなたとともに苦しみに耐え)ることができるよう。

この祈りは「神の子イエズス・キリスト」と始まります。典礼文の中で、三位一体の神に、とりわけ父である神に祈るのは通常ですが、ごく稀に神の子イエズス・キリストに祈る式文があります。病者の塗油の秘跡でも、神の子イエズス・キリスト、あるいは救い主イエズス・キリストに直接祈ります。わたしはこの祈りを実際に声に出して唱える時、かつて神学校で習ったことば“Christus Medicus”を思い出します。「医師であるキリスト」という意味です。古代教会の教父たちは「医師はただ一人、キリストである」と主張し続けました。そして、主イエズス・キリストが病気の苦しみを共に担ってくださったように、牧者である監督(司教)は病者のために最善を尽くすべきであると説きました。病気に苦しむ人に寄り添うのは司祭としての大切な役目なのだという事実をこの祈りの始まりに思い返します。

「すすんで人となり、苦しみを受けられました」と唱える時、福音書が教えてくれるイエズスさまの生涯を思い起こします。具体的に思い起こすイエズスさまの出来事はそれぞれ違います。ある時は、病気の人の手を触れて癒す場面であったり、ある時は、「もう泣かなくてもよい」と身近な人の死に悲しむ人々へのやさしい言葉であったりといろいろです。しかし、わたしのこころの中で、このことばから導き出される一つのイメージは十字架のイエズスさまのお姿です。

「あなたとともに苦しみに耐えることができますように」と祈願は締めくくられています。括弧づきで書かれていることばは、秘跡を受ける人の心身の状況を配慮して唱えなくてもよいことになっていますが、わたしは必ず唱えるようにしています。というのも、わたしにとって「あなたとともに苦しみに耐える」ことこそが、この祈りの中心点に思えるからです。

生きるには苦しみが伴います。生きるとは苦しみそのものかもしれません。「何故、人は苦しむのか?」「何のために、人は苦しむのか?」という問いかけは生きることへの根本的な問いかけのように思えます。いろいろな人生観が、いろいろな宗教や信仰が苦しみの原因と意味を説明しようとしています。そのどれもがきつと正しいと思います。仏教では四つの苦しみ(四苦:生老病死)を教えの出発点とし、四つの悟り(四諦:苦集滅道)が苦しみの原因であり、解放の道であるとするそうです。聖書でも苦しみの原因は人間の罪の罰の結果であると捉える傾きもありました(創世記3章16-19節、列王記下24章3-4節など参照)。しかし無垢でありながらもなぜ苦しむのかと問いたですヨブに、神はヨブの主張は正しいと認めます(ヨブ記42章7節)。ヨブは無垢でありながらも、ひどい苦しみを課せられたのです。こうして罪の罰のために人は苦しむのだという理解はあまり説得力のあるものとならなくなりました。ではどうして苦しむのでしょうか? 苦しみは人を回心させ、完成させる教育的な手だてであるという理解も根強くあります(マカバイ記2章12節、ヘブライ人への手紙12章3-13節、ローマ人への手紙5章3-4節など参照)。こういった理解は当時のギリシアの教育理念と結びついて古代の教会では教父たちから支持されたそうです。しかしながら、このような理解も何かが欠けているように思えてなりません。結局のところ、苦しみについていくら説明を重ねても、「なぜ苦しむのか?」という問いかけへの答えは得られないではないかと思うのです。

聖ヨハネ・パウロ二世教皇が残した美しい文書があります。『サルヴィフィチ・ドローリス』と呼ばれるこの使徒的書簡は「苦しみの持つ救いの力」ということばで始まります。「キリストのご受難を分かち合う」と題された章の中に「一人の人間がキリストの苦しみにあずかれるものとなれるのは、第一にキリストが、『ご受難への参加を人間に開いたから』であり、第二にキリストご自身が、ある意味で、その贖いの苦しみの最中で、すべての人間の苦しみにあずかる者となられたからです」(20)と記されています。つまり、主イエズス・キリストの受難と十字架の死のお苦しみに、人間が生きている中で直面する様々な苦しみとは無関係ではないのです。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ人への手紙2章19節)と自分のいのちとキリストのいのちとの一体を生きているわたしたちキリスト者にとって、苦しみとはイエズスさまの苦しみにあり、苦しみを生きることはイエズスさまの苦しみに与って(組み入れられて、一致して)生きることを指すのでしょうか。もはやそこには苦しみについての上にあげたような様々な説明は説得力を持ちません。なぜなら苦しみとは信仰の次元、人生の体験の次元の出来事だからです。使徒的書簡は続けてこういいます。「人間は信仰によって、キリストの贖いの苦しみを発見しつつ、またその中に、人間自身の苦しみを発見していきます」(同)。

「あなたとともに苦しみに耐えることができますように」という祈りの一節は、病気の苦しみが一人だけのものではない、主イエズスさまの苦しみにつながるものなのだという信仰の核心の部分の思い起こさせてくれます。苦しみの渦中であつたとき、人は往々にして孤独の淵をさまよいます。独りだけで苦しみを受けとめようと七転八倒し、苦しみの計り知れない力に負けてしまいます。苦しみの中での孤独。これこそが苦しみがもたらす闇の力、悪のいざないではないでしょうか。

生まれて始めて聖堂に入ったおばあちゃんが「ああ、この人も苦しんでなさる。有り難いことだ」とつぶやいたというくだりを福田神父様の著作の中で読んだことがありました。共に苦しんでおられるイエズスさまの十字架を仰ぎながら、苦しみと悩みの多い人生を歩めたらどんなに幸せでしょうか。二月十一日の世界病者の日を間近にして、少し苦しみについて思い巡らせてみました。願わくは苦しみの体験が深まる人生でありますように。